夢ひよこ

文／徳留みゆき
絵／古賀桜子

ここは、ヒロくんの夢のなか。
その、夢のなかでも寝ているヒロくんに、話しかけてくる子がいました。
「ヒロくん、ヒロくん」
「うー……、ねむいよー」
「ヒロくん、ヒロくんってば」
何度も名前をよんでいると、ヒロくんの体が少し動きました。
「もー、だれー？」
ヒロくんは目をこすって、そう言いました。
「ボクはひよ子だよ」
ヒロくんの目の前にいたのは、小さなくちばしに、
かわいい目をした『ひよ子』でした。
ヒロくんは目をまんまるくして、頭の上にハテナを浮かべています。
「ヒロくんは、ボクのこと知ってるかな」
「……わかんない」
ひよ子は、ヒロくんの答えに「そっか……」と、しょんぼりしました。
ヒロくんは、そんなひよ子を見て、こう言いました。
「ねえ、キミのこと、おしえてよ」
すると、ひよ子はうれしそうに「うん」と言いました。

「ボクはね、ヒロくんが生まれる、ずっとずーっと前に生まれたんだ」
「キミ、おじいちゃんなの？」
ヒロくんは、そう言って体を乗り出します。
「ううん、違うよ」
それはボクのご先祖さまだよ。と、ひよ子は答えます。
「そうなんだ」
「それでね、ボクを考えた人は
『大人にも子供にも愛されるお菓子を作りたい』って思っていたんだ」
「えっ！　キミってたべられるの？」
ヒロくんは、びっくりしました。
「うん。ボクは『ひよ子饅頭（まんじゅう）』
っていうお菓子なんだ。
今、キミとこうして夢のなかで会った様に、
ボクのご先祖さまも、その人と夢のなかで会ったんだよ」
「そうなの？」
「そう。それで、その人が一生けんめい考えて、作っていくうちに
今みたいなボクの形になったんだ」
「すごいねっ！　それ」
ヒロくんは、ひよ子にそう言いました。
「ねねっ、もっとおはなししよう」
「ごめんね。もう時間がないや」
ひよ子は、すまなさそうに言います。
「えーっ」
「大丈夫。また会えるよ、きっと。
ここで会ったことは、誰にもナイショにしてね」
ひよ子は、そう言い残して
ヒロくんの夢のなかから消えてしまいました。

次の日の朝、出張から帰ってきた
ヒロくんのお父さんが、おみやげを渡してきました。
「ほーら、ヒロ。お前は知らないと思うけどなー、これは」
「ひよ子だっ！」
「おっ？　知ってるのか」
「うんっ、ひよ子はねっ
『大人にも子供にも愛されるように』ってつくられたんだよ！」
「そっ、そうなのか？」
お父さんはヒロくんの言葉にびっくりしていました。
けれど、ヒロくんはそんなことも気にせず、
ひよ子の入った箱を開けて、一つ取り出しました。
包んでいる紙をとると、手のひらに乗せてヒロくんは言いました。
「また、おはなししたいな」
「どうしたんだ？」
お父さんがヒロくんを見て、首をかしげています。
「えー？　ナイショ」
その時、ヒロくんには手のひらの上のひよ子が、
ウィンクしたように見えました。